

## 馬車運般業者の

### 酒樽運んだとき

(注、真実であるがため、人名を省き書き記すが、面白い話です)。

佐呂間村も、人口が増えて来るに従って、商店も増え、商品の輸送も頻繁になって来て、商店主も人間、馬車追いも人間感情を持つているため、様々なトラブルが出来た。

ある馬車追いが、ある酒類を販売する店の酒樽や、他の商品を依頼され、荷物積んでその店に到着して、店に置く物は店に、倉庫に置く物は倉庫に置いて、いざ運賃を貰う段になつたら商店主が、「この商品の置き方は駄目だなんていない。店に置く品物はな、お客様が外から見て直じに、これは何なのか判るよう、商標(レットル)を、お客様の見えるように置かなければ駄目なんだ」と、どなつたそうだ。

(これは、これだけの話でなく、この商店主のどなり方に腹を立てた馬追いは、考え考えた末仇をとうとう取つたのだつた)。

その馬追いは、そのとき「はいすみません、すみません」と言っていたが、「今日の敵は絶対取るぞ」と、胸に秘めたとのこと、数日後、又その店の酒樽外荷物を、依頼された。先日の腹立ちを耐えていたので、商店主も、その馬車追いが怒っているとはつゆ知らずだつた。

留辺薬駅で積んだ荷物の中に、酒樽が何時ものようにあつた。依頼された荷物を全部積んで佐呂間え向つて、馬を追つた途中馬車を止めて、馬に休憩を何時ものようにさせ飼馬をやつて、一仕事に取りかかった。

先ず、四斗の酒樽の、上の方の一番下の、たがを、準備して持つて来た玄能で、トントんと叩いて少しづつ下に下げて、たがが少し下つたところで、「キリ」(小さな穴あける道具)で穴をあけた。そうしたら、ピューツと酒が飛び出した。細く飛び出る酒を、丁度うまい具合に一升瓶を当てがい、細く飛び出る酒を、四斗樽の中から一升瓶四本取つた。

四斗分から四升抜き出せば一割抜いたことになる。そうして、二つの樽から八升抜いて、その穴に、用意して来た。キリの穴を塞ぐ細く削つた竹の棒を打ち込んで、酒が飛び出すのを止めて、又玄能で、樽のたがを上叩き上げて、穴を明けたところを隠して、又馬車を追つて出発し、店までの途中にある我が家の物置きに、八升の酒を置いて、依頼された店に到着したのであつた。

その後の店の主人の話、  
「天気続々夏は、樽の中の酒も蒸発するんだね。今年の酒樽は、ずい分減つていた、一割も蒸発していたね。酒は全く損だ儲はなかつた」と。こぼし愚痴っていたと。

語り手 関東 勝  
文責 徳永 良行

### 樽についてと桶もついでに

佐呂間町の開基百年になった現在、「樽」とか「桶」とか言う言葉名称の知らない若い人が多いのではないかと。樽・桶は液体又はどろりとした物の入れ物で、現在は、殆んどその様な入れ物はプラスチックに取つて替つてゐる。元は二種とも木製であつた。樽は蓋の付いた物の方の名称で、桶は同じ物でも蓋のない方を言つた。桶には両側に少しの高くして両側を繋がる手(棒)がついていて、人手で持ち易くなつてゐるものもあつて、これは「手桶」と言つてゐた。

文責 徳永 良行



手桶



樽

## 寒中の家鳴り

私は、大正一二年生れで、昭和になったころからの物ごころついたように、記憶している。佐呂間町も、開拓が軌道に乗って来たのは、大正に入ってからだろうと思うが、開拓者の草葺の着手小屋が漸次、木造の板囲いの当時の本建築の住宅が、移民開拓者は完成したら一段落、目的の一部果したと個々の人々は感じたでせう。

その、昔の木造住宅が、寒い寒い冬の夜中に、パンというか、ダーンというか可成りの大きい音がした。その音を幾度も聞いた記憶がある。現在のように近代的な住宅になっては、殆んどの人々は、寒中の音は聞かなくなつたでせう。

何故寒い夜中に、大きな家鳴りがするのかその理由の判らない頃、若い夫婦が内地から移住して来て、幼子を寝かせるとき、子供がむづかつて仲々眠らないときなど、その家鳴りがダーンと鳴つたら

「ほれほれ、お前がむづかるから。鬼が鉄の棒持って来てうちの家を叩いたぞ。そんだから早く眠れ眠れ」と言う話等もよく聞かされた。子供もその大きな音を恐れ、静かに眠つたと言う程のエピソードもある。

現在私は、満七〇歳になるが佐呂間生れです。私より若い人でも、寒中のあの夜中の音の体験者は沢山いると思えますが。何故この

様な音が昔の木造建築に鳴つたか、色々古老の方又は故人となった生前に聞いたが、満足するような答えは得られなかった。

昔の板張り木造家屋は、桶やバケツに水を入れたま、で凍つたら、水が全部氷になって樽しづれが強くなつたら、氷の表面がひび割れが出来るとき音がしたが、木造建築の、梁や、柱に水分がひそんでいて、凍るとき膨張するときの音だったか？

なにしろ、昔の木造建築の家は寒中によく大きな音がした。

## 春から夏の家鳴り

これから書く分私の体験で、私事で申し訳ありませんが、戦後開拓に入つて、住宅を建てるに、春の雪解け前に山で、建築用材を切つて製材をして、雪のあるうちに切り込みをして雪が融けてから建て前をしたのだが、その住宅が、春の天気の良い日の、春のそよ風吹く頃特に新築した家がよく大きな音をして鳴つた。

その春の新築家屋が鳴る理由はよく判つたが、山野に生えている木は、春先になり若芽が出る頃になると。水分を十分に溜め込んでいる。その水分を膨張するだけ吸い込んだ木材で家を建てたら、春の乾燥期に、柱とか梁桁などの、ある程度の太い材は、水分の乾燥が表面と。中の心の方とが平均にならないた

め、表面だけ先に乾燥して縮むため、割目が出来ると、その割目が急激に割れるときに、パンと瞬間の音を立てる。

春の暖かい昼食後の昼休み等しているとき、目の前で、柱が立にひび割れたのを、目の前で見たことがあるが。家屋の木材の使い場所に寄つて、新築家屋の、春から夏にかけての乾燥のための音がするのは、三年位い経つたら。音がしなくなつたと思う。正確に何年位いとは言えないが。

## みかんを焼いたり煮たりして喰べた

昔の家屋の、家鳴りの記事について書いたついでに、生活の中の一部を、みかんについて思い出を書いて見ます。

みかんは、正月に食べるものと私の子供の頃思っていた。北海道の開拓者の子供は思っていた。

板囲いの住宅は、外気の冷めたい空気は、いくらでも室内に入り込む。正月用のみかんなど凍っているのが当時は常識であった。だから食べるときは、大勢の家族が食べる場合は、鍋にて湯を沸かしてしばれみかんを入れて融かして食べた。又はストープの上のみかんをのせて。ひっくり返しひっくり返ししながら中心まで融かして食べた。現在の若い人は想像もしないでせう。

## いとう魚物語

近年幻の魚といわれているという魚について、私の体験を少しく書かせて頂きます。

### 開拓当時の伝説

明治三六年春、農業者として初めて、仁倉に入地された吉川、中川両名のことは、既に昭和四一年発行の、佐呂間町史に明記されていますが、その頃の佐呂間川は、未開の原始林の中を曲りくねって流れていて、処々に深い淵が出来ていて、そこには、ウグイ、アママス、イワナ、ヤマメ等沢山な魚が泳ぎ回っており、冬も氷の下で生息していた。中でもガンピ原（今の佐呂間東区）の北西の山岸に、八反堀と呼ばれた大淵は、周囲の桂やタモの大木が、枝を抜けて淵を覆い、昼尚暗く底気味悪い場所であった。ある夏の暑い日、釣りに行った人が見た話が伝って、私の耳にも入ったことなのだが、

### その話は

水面を、大きな青大将が泳いでいるところを、物凄い水音と共に、大きな口を開いた魚が、青大将に飛びつき喰えて瞬間に、水の中に沈んだと言う。伝える話では三米位もあつた魚だと言うが、大きさはともかく、この大きな荒っぽい魚は、いとう魚とのことだが

その現場を見た人は、胆を潰して逃げ帰り、「あれはきつと、佐呂間川の主に違いない」と、驚きの余り、人々に言いふらした。そればかりの話でなく、佐呂間川には、昔は、大きないとう魚が沢山いたことは、本当の話である。

### いとう魚の私の体験談

昭和一五年の夏、当時仁倉の沢で農業をしていた辰五郎爺さんが、浜の漁師から古くなつた魚網を貰って、引き網に改造したの持っていた。

近所の若者と共に私もさわわれて、佐呂間川に魚を獲りに行った。子供等も大勢ついて川に來た。なるべく木の根等のない場所を選んで、網を引き回し、柳の下等、魚の隠れていそうな所を、長竿で突き回し、魚を追い込んで網を上げるのだが、一回目に「いとう」が何尾か入つたので、喜んで引上げた途端に網が破れて、魚はみな逃げてしまった。

これでは何もならないと、二回目から、網に魚が入っても網を上げずに網を狭ばめて、網の中の「いとう」や鱒を、ヤスで突いて獲つた。網が破れたりしたことで、時間も予想以上にかかり、昼も可成り早くに過ぎたので、辰五郎爺さんが来ている者みんなに、獲つた魚を分配して帰ることにした。人数が多いため、私に当つたのは鱒の一匹だった。

家に帰つての夕食後、私は、日中の魚獲り

のこと考え、「いとう」も沢山いたことも思つて、魚獲りは、一人で行つた方がよいと氣付き、うちにも、浜の漁師と、物交した網があるのを持ち出して、吠に網と鉈を入れて佐呂間川に出かけた。

昼間荒した処の少し下流の、仁倉川の出尻の処に辿りつき、腰までの深さの処に網を張つて、やはり魚獲りの好きな、本家の父のところに、昼間のことや、今網かけたことなどを話してみたくなり、一軒程はなれた本家まで遊びに行った。

お茶等御馳走になり、話に花が咲いて思いがけずの時間を過してしまつて、先程掛けた網のところに来たら、満潮のため五・六〇センチも水嵩が増していて、掛けたときと打つて変つた川の様子に、嫌な感じで暫くためらっていると、風もないのに、向いの山の方で、「ポキリ、ポキリ」「ガサガサ」と可成り大きな音がして、何か山から降りて来る感じ、瞬間、「熊」と直感同時に頭髮が全部逆立って、「ゾッ」

少しの時間が過ぎて、心落付けば嫌いな音のする方は、大分距離もあるようだし月も出て少し明るくなった。「何とか一本でも」網を上げる寸前、お月様に向つて心に念じた。そのとき、月に照らされる水面に、一筋矢でも流れて来るように、網の方に近づいてくる波がある。「アッ」天拓、いとう魚だと直感した。素早く丸裸になって、鉈鞘の紐を腰に結ぶ、魚のかかつている処目掛けて、飛び込

んで行った。

思った通り、おおきないとうが掛って大暴れ、網が破れるかもと夢中でしがみつき、鉈の背で減多打ち、無事に吠に入れたが曲げねば入らぬ程の大きさ、一米以上はある。お陰様だなあと感謝。

そうだ、父さんにも思い再び本家に立寄り、父達とランプの灯りで見したが、見事な大きな魚であった。茶色がかつた部厚い皮に、黒褐色の斑点があり、頭は鮭等より平たくて、鋭い歯を持っている。肉は白味の油濃、味噌漬けにして焼いて食べたが、当時の食糧事情では、大変よいお菜であった。本家には勿論半分差し上げて来た。

文責一九八二年寿大学研究生 津田 仁作

### 余白に補足、北海道新聞社発行の書

#### 『北海道の淡水魚』より

湿原の川や湖沼に生息する日本最大の淡水魚、アメマスと同様、かなり長期間沿岸で生活することがある。道東や道北で海の定置網に入ることがある。食食で主に魚を食うが、カエル、ヘビ、ネズミなど捕食する。頭がやや扁平、口大きい、鋭い歯をもつ、背面は青緑褐色を帯び、腹面は銀白色、腹面の外全身に小黒点散在、(簡単に参考に転載)

この分文責 徳永 良行

## 夏枯れ財布を助けた亜麻

開拓という時代が、徐々に遠ざかり始めた大正五年から、佐呂間市街の(現天光堂のところ)林商店があつてその店に、夏枯れになった財布を持った農家の親父さんが来て、「亜麻を抜いて(刈取りせず手で抜く)脱穀するだけだから、金を貸してくれ」と言つて来る光景が見られるようになった。それは亜麻という作物は、真夏に収穫されるから、金になるのも早い。

林商店は、湧別の日本製麻株式会社湧別工場の、佐呂間特約店であつたのだつた。亜麻保管倉庫を(一五〇坪)現在の佐呂間中学校の前方鉄道線路が有つた当りにあつたという。

大正九年六月、佐呂間にも亜麻工場建設の必要性があると、佐々木一二、片山種四郎が中心となり、亜麻共同製織組合を設立し、佐々木一二が組合長となり、亜麻茎の共同販売第一次加工場を東区に建設し、創業を始めた。

そのため、亜麻耕作の反別も増して、西富から若佐方面にかけての亜麻の、保管倉庫を市街の二九号の十字路に建てた(一二〇坪)。

亜麻は、戦争中は重要な軍需品としてあつかわれ。戦後は衣料品繊維品の不足を補うため、やはり耕作は続けられたが、昭和三十年頃より化学繊維が出回り始め、これに押されて、昭和四十年三月、亜麻耕作中止が決定された。大正五年(一九一六年)から佐呂間に

亜麻耕作が始まって、終りを決定した一九六五年まで丁度五十年であつた。

大正九年東区に建てられた亜麻第一次加工工場は、大正一二年秋子供火遊びによって火災になり、大正十五年に現在の、大沢木工場から鈴木木工場付近に再建したのが、昭和四年工場の失火で全焼、五年春三度の再建完成、五年六年と操業して、昭和六年秋にその会社は満州に工場施設と共に進出して行った。もう佐呂間で見られなくなった亜麻についてのルーツ、それが現在の農協の前身に拘わりがあるとか。

### 記事の関連・産業組合から農協まで

産業組合法により、大正一一年五月亜麻製織組合を改組、佐呂間村亜麻購買販売組合として組織を強化、昭和二年、新しく産業組合の設立を計画、佐呂間村信用購買販売利用組合を設立。それが戦時中の、昭和一九年二月農業団体法に依り農会と統合、佐呂間村農会となり、昭和二三年三月解散その四月、農業協同組合と名が変り現在に至っている。

文責 小島善之丞

## 金輪の馬車と法螺吹き

陸上の輸送は、佐呂間町の開基百年になる頃の今は、トラククや、汽車の貨車等になってしまつて、農家等は、トラククを持つていながら、トラクターのトレーラーまで併用している。

全く馬車と言う物を、使わなくなったのは、第二次大戦後、経済復興が軌道に乗つた昭和三〇年代に入つてからだ。戦後の一〇年位は徐々に、タイヤ付き舗道車と言う馬車が、金輪の馬車に代りつつありながら、僅か普及したのみで、トラククになつてしまつた。

### 開拓当時の金輪の馬車は、

経済的に未だ苦しいころ、金輪の馬車を購入するなんて、現在のトラクク手に入れるより大変だつた。現在のトラククでも、三〇年前頃の農家を買う場合は大変だつたらう。

筆者の小さい頃。うちの親父との酒呑み友達に、大法螺吹きがいた、明治の末期に佐呂間に移住して来て、農家ではあつたが片手間に、馬追ひ（現在の運送業）をしていた。その親父さん、綽名も奇抜なのついていた。

「佐呂間で一番先に、馬車を買つたのはこの俺れだつた。大正の始めだつたからな、市街の店の仕入れの品物は、殆んどわしのところに頼みに来た。留辺薬まで店の主人乗せて

行き、その店の荷物積んで帰る頃によ、佐呂間に歩いて荷物を背負つたのが、留辺薬の峠を佐呂間に向つて登りかかったのなんかに追いついたらよ。

「小父さん、佐呂間の方に行くんだべ、駄賃はずむから乗せてくれ」ところ来たらよ、店の主人から当り前に運賃貰つてよ、旅の奴から駄賃貰うべさ。儲かつて儲かつてよ、だからな。二・三年のうちに。わしの真似してよ。馬車追いがずい分増えた。

尾崎天風がよ、中佐呂間の市街で料理屋しながら馬喰うしたり。馬追ひしてたところからの友達だつた。尾崎天風が留辺薬に行つてからもよ、たまに佐呂間の方に来たらよ、必ずうちへ寄つた。何時も乗り馬で来たな。ある日うちえわざ／＼来たと言つてよ、天風が俺に「いよいよわしも代議士になるため立候補する。一つ佐呂間の方を頼む」と打ち明けて来た。俺は、「よし友達のことだ佐呂間の方まかしておけ」と言つてやつたら、やつこさん喜んでよ。

等々と、言わしておけば、聞く方も退屈しない程の法螺吹き親父によつて。開拓当時の金輪の馬車が如何に、重要な道具であつたかを書いて見ました。

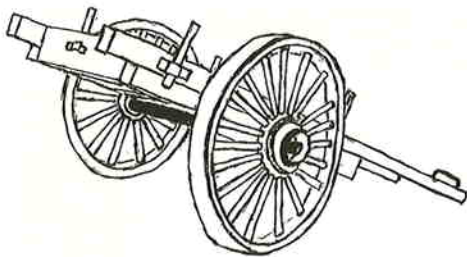
金輪の馬車について、筆者の知り得た記録では、明治三九年に富丘の地に、農場建設計画考え視察に来て、明治四〇年入植、明治四二年にあの有名なクリスチャン宣教師、ピアソン夫妻を、現在の留辺薬町花園に在つた五

号駅通まで、馬車で迎え送りをしているから、佐呂間の地に、耕馬兼運送用等の馬車が動力の花形であつた頃は、誰も彼も、現在の自動車を羨しがるように、金輪の馬車に憧がれたのでせう。

またこんな話もあります。若佐郷土史作成のための調査中に、古老から聞いたのが、島田魚屋が馬車や冬は馬櫓で、魚仕入れたり、移動販売のよう、農家回りにして馬櫓で売つて歩いた話。

大島菓子屋が、武士市街で菓子製造して、川口、常呂方面や、計呂地、バロー方面に、馬車や馬櫓で、菓子の卸しに運んで行つた馬は、大島菓子屋で馬を飼つていた等。色々な話が馬の時代は、商人も馬は必需品だつた。

文責 徳永 良行



金輪の馬車